

えぞち  
蝦夷地の交通・交易・行政の要地⑥ ゆうふつかいしよあと  
勇払会所の跡

勇払会所とは、江戸幕府が認めた出張所のようなもので、物流やアイヌ民族との交易などの中心的な場所でした。苫小牧発祥の地で、北海道開拓や苫小牧の歴史上からみても重要な場所だといわれている「勇払会所の跡」についてご紹介します。

慶長 9 (1604) 年に松前藩ができてから、勇払は松前藩の支配のもと交通の中心として栄えていました。勇払は、北前船が立ち寄る港で、さらに、勇払越えと呼ばれていた太平洋と日本海を結ぶ唯一のルート上にありました。このため東西の蝦夷地の分岐点として「運上屋」と呼ばれるアイヌ民族との交易所を中心に栄えていました。

寛政 11 (1799) 年、ロシアなど外国の蝦夷地侵略を防ぐため、江戸幕府は、急激に発展していた漁業の利益を幕府のものとするため、蝦夷地を直轄しました。「運上屋」を「会所」に改め、幕府の役人を置き、従来の機能に加えて公務を行う出張所の性格を持たせました。

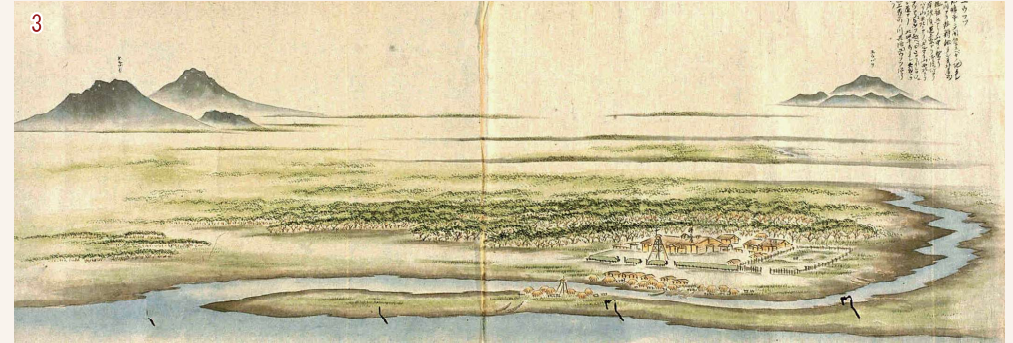
## 勇払会所の跡

市指定史跡 昭和 31 (1956) 年 3 月 10 日指定

所在地：苫小牧市字勇払 50 番地 4、12

所有者：苫小牧市

管理者：苫小牧市教育委員会



寛政 12 (1800) 年には八王子千人同心が移住し、開墾と警備にあたりました。さらに文化元 (1804) 年には、勇払川の東側にあった会所を現在の記念碑が建っている地点に移動し、会所は建替えられました。会所の周囲には、米・塩・網・産物などを納める倉庫、大工・鍛冶などの作業小屋、通行人などの下宿所、弁天・稲荷などの船乗りが信仰する堂社などが立ち並び大きな集落を形成しました。

文政 4 (1821) 年外国からの侵略の緊張が緩和したと考え、幕府は直轄を止め松前藩に戻しましたが、安政 2 (1855) 年に、再び外国との緊張が高まったとして直轄し、蝦夷地の防備を強化しました。この頃には、会所は改築によりさらに拡大されていましたし、勇払がイワシ漁による米粕の重要な運搬の拠点となり、栄えていたことがわかります。

明治 6 (1873) 年には、開拓使出張所が勇払から当時の苫細村(苫小牧)に移り、勇払の時代は終りを告げました。「勇払会所の跡」は、かつて、この地方が交通、交易、行政の要地であったことを伝える貴重な史跡です。

※1 八王子千人同心 (はちおうじせんにんどうしん)  
16、17 ページの「蝦夷地開拓移住陣士の墓」参照



## 写真の解説

① 安政 3～5 (1856～1858) 年幕府の命により北海道と樺太を調査測量した幕府の役人目賀田守蔭 (めがたもりかげ) が各地の沿岸を描いた鳥瞰図。これは明治 4 (1871) 年に開拓使の要請で自ら清書して提出したもの。「北海道歴史図」(北海道大学蔵) ② 勇払会所の跡に建立された記念碑 ③ 東蝦夷地および国後島、択捉島の各場所の美麗な風景画を収めた「東蝦夷図巻」のうち勇払を描いたもの。安政 4 (1857) 年頃に仙台藩の警備に加わった画家の作品と考えられている (北海道大学蔵) ④ 勇払ふるさと公園内にある勇武津資料館は、勇払会所を模して造られている。